

教区だより

2021

6月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第376号

再開にあたって

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなつた現実には直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられると思います。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願ひながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出遇い直していくことが大切ではないかと思ひます。

このような願いを引き受け『教区だより』の発行を再開してまいります。



人間の理知は 子どもから 笑顔を奪う

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

1 頁 「ことば」

2 頁 **連載** 悲しみが通じあう時 ―愚禿悲歎述懐を通して―

《第3回》

よつじ 四衢 氏
あきら

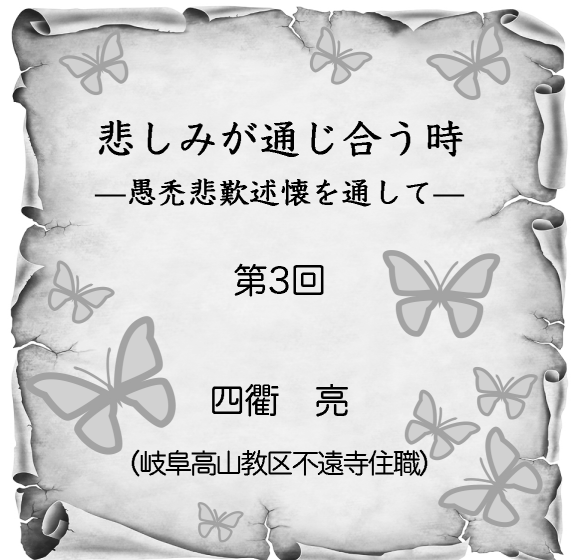
3 頁 「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

よしもり 義盛 氏
みか 充香

4 頁 教務所からのお知らせ

イマダカラ[®]

編集委員 蒲池 義圭



外儀げぎのすがたはひとごとに
賢善精進けんぜんしやうじん現あらわせしむ
貪瞋邪偽とんしんじやぎおおきゆえ
奸詐かんざもはし身にみてり (聖典五〇八頁)

親鸞聖人は、善導大師の教えをいただいて「あらわに、かしこきすがた、善人のかたちを、あらわすことなかれ、精進しやうじんなるすがたをしめすことなかれとなり」(聖典五五七頁)と語られ、その理由は「内に虚仮こけをいなく」からだと言われます。ただ、私たちは内に懐く嘘うそや邪よしまな思いを隠そうとして、わざと賢けんふろうとしたり善人づらすのではないのでしょうか。悪いことであるより、良く

なったほうがいいだろうと考え、より良くなろう、より成長し、より幸せでありたいと思っています。そしてそのために準備を怠らないよう努力するのです。

最近テレビで、早くから学習し将来への備えをすることで生涯賃金も違いますと呼びかける学習塾のCMがあります。三歳くらいから準備が始まります。小学校は中学の、中学は高校を、高校は大学を目指しての準備になります。もちろんその時々を楽しむのですが、全体としてその先の将来を目指します。

大学生は大変な思いをしながら就活をします。就職すれば次は結婚の準備です。さらに子どもを授ければ子どもの将来を見据えた子育てに励み、マイホーム獲得のための準備もしなければなりません。子どものための準備から手が離れると定年後の再就職の準備、老後の準備、介護の準備、お葬式の準備、最後はお墓の心配と、自分がいなくなつたあとのことまで準備して、人生が終わるのです。

明日のこと、五年後、十年後、さらにその先を追いかけて、いろいろ準備して終わる。何をするために生まれたのか、今ここに生きているということを確認することなく、前のめりになって宙に足が浮いたまま、気がついたら終わっていた。特

別な悪意があるのでも狡猾こうかつさがあるのでもないのですが、これが人生を貪る姿だと経典は示します。「身の営務えいむを勤めて、もつて自ら給済きゅうさいす。(略)念おもいを累ね慮なまりを積み、心のために走せ使つかいて、安やすき時あることなし」(聖典五八頁)。身を養うことに追われて、あかしなければこうしなければと先々を見つめて心碎いて準備に走り回って、「今ここ」に安んじる時が無いのです。

「今ここ」にはない人生を思い描いて、人生が自分の予定した通り、準備した通りうまく運ぶものだと思ひ込むのです。そして、その通りいかないとあやうな予定期間いかなかった、準備が悪かったと、恨みを残しながら、それを積み重ねて、あの時こうしておけば、これがあつたばっかりにと人生に瞋いかりを向けることにもなります。予定通り、思い通りいかないまが人生で、「ここに今」生きる私があり、その私が生きていることにある様々な出会い、支え合う関わり、向かい合う課題を、自分自身のものとしていただくことなく、また別の人生を思い浮かべるのです。この偽りと狡猾さが身にみちる奸詐かんざなのでしょう。

その自身を深く悲しんで、それを余すことなく知らせてくださる教えへの謝念うたが詠うたわれています。

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」



「お念仏申す友」

北海道教区第20組法蘭寺坊守 義盛充香

二〇一五年から法蘭寺では寺報づくりを始めました。きっかけは「北海道教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」での連続講義で自坊のことを見つめ直す機会を得、お寺からご門徒へ発信する手立てを持ちたいと思ったからです。

「寺報」と言いながらもかしこまったものではなく「お寺からのおたより」と称して、A4表裏一枚ものを年四回発行しています。現在二〇〇五〇代の八名の方がおたより班として活動中です。その内容は、まず私とおたより班で編集会議を行い、内容や構成を考え、班内の書き手が手書きで

作成し、住職がチェックをしてカラー印刷したものをご門徒へお渡しします。

編集会議では「どうやったら世代を問わず興味をもって読んでもらえるだろうか」「ご門徒の皆さんが知りたいことは何だろうか」「お寺から伝えたいことをどのように書いたらよいだろうか」と真面目に話し合いますが、横道にもよくそれます。和気あいあいと話している皆さんの姿を見ると、なんだかいいなあと思えてきます。年代も職業も性格もばらばらな方たちが、職場でも家庭でもない、お寺のおたよりというただ一点でつながっているからです。

そんな時、常に私の頭の中に「御同朋」「御同行」という言葉が浮かびます。阿弥陀仏の名のもとに人々が集う場ができ、そこには親鸞聖人もそばで微笑んでくださっている気がするのです。振り返るとおたより班に限らず、ご門徒の皆さんとおみがきやお掃除をしている時や、ご法座で皆さんと『正信偈』を読みお念仏申す時も、やはり同じように「御同朋」「御同行」の言葉が浮かび、共にお念仏申す仲間のいる嬉しさ、心強さを感じます。

しかし、昨年は新型コロナウイルスの感染拡大により、ご法座も例年の約半分に休席としたため、皆さんとお会いする機会も減ってしまいました。そんな中でもおたより班は少人数とあって、状況

を見ながら例年通りの活動ができました。これまでのおたよりは、小学生から年配の方までご家族で読んでいただき、町内だけでなく遠方に住むご門徒とお寺の橋渡し役も担ってくれました。さらに新型コロナウイルス感染症拡大下の現在は、ご法座の代わりという役割も加わっているのではないかと考えています。例えば親鸞聖人の『御消息』や蓮如上人の『御文』等、浄土真宗ではおたよりによって現代に生きる私たちにまでお念仏の教えが伝わっています。伝える大切さ、伝わる喜びがおたよりにもあるのではないのでしょうか。

なにもお寺に集える方ばかりでなく、おたよりをつくってくださる方も目にしてください。ご法座も「御同朋」「御同行」なのだ、と新型コロナウイルス感染症拡大下で気づかされました。親鸞聖人が大切にされたお念仏申す友の存在が感じられるようなおたよりづくりを、皆さんと楽しみたいと思っています。



「ほうおんだより」の紙面

教務所からのお知らせ

《得度》

二〇二二年五月五日付

近江第五組 淨現寺 七里千春
近江第五組 淨現寺 七里陽香
近江第六組 福泉寺 藤井有子

〔敬称略〕

《京都教区教師検定事前学習会について》

期 間 八月十七日(火)～二十三日(月)

会 場 京都教区会館大講堂

科 目 真宗宗学・仏教学・声明作法・法規

対象者 本山で行われる「夏期教師試験検

定」受検希望者

(『真宗』5月号65頁参照)

※今年度はコロナウイルス感染症感染拡大防止のため各科目定員を二〇名とします。申込期間は七月一日～二〇日までです(先着順)。期間内にFAXにてお申し込みください。申込期間前のお申し込みは受け付けませんのでご注意ください。
詳細は今月同封の開催要項をご覧ください。

イマダカラ

最近、一昨年に亡くなられた宮戸道雄先生の言葉を思い出すことがあった。宮戸先生は「子どもは大きくなったら大人になるけど、大人は大きくなったら何になるのですか?という質問があるんやけど、皆さんは何になるのですか?」という法話を度々されていた。

これは元々、小学生が新聞に投稿した質問だったようだが、宮戸先生はこのことを大事に、そしていつも考えておられたのだと思う。それこそ何度も何度もこの言葉を聞いたように思う。しかしながら一度も、何になるかという答えを私は宮戸先生から聞いた記憶はない。業を煮やして何になるのかと答えを聞こうとした人には「さーて、何になるのですかなー?」とニヤーっとして話しておられたのは覚えている。かくいう私も相当焦れた思いをしたこともあった。宮戸先生は私に問いを持つということを教えたかったのだと、今は思う。

子どもは「できないことが沢山ある」と無意識にわかっているから努力し大人になろうとする。だからこそ大きくなったらと思うのだろう。大人となると意識が邪魔をする。だから私は自分がこれから何になるかと考えることもなかったのだと思う。

まずは自分が何者なのかと問うことから始めないと宮戸先生のこの問いにはお答えできないのと思う。さて、宮戸先生は私にもニヤーっと笑ってくださるのだろうか。

(編集委員 蒲池 義圭)

編集後記 the editor's note

先月号休載した「今、この時に、親鸞聖人に遇う」では、引き続き、他教区の方に執筆をお願いしていく予定です。教区は違えども、私たち同様、それぞれの現場で、悪戦苦闘しながら歩んでおられる方々のお言葉に触れる機会として、今後も大事にしていきたいと考えています。

自坊では、例年5月に報恩講を執行していますが、新型コロナウイルス感染症の感染再拡大を受け、責任役員・総代による内勤めとすることを、

先日責役総代会で決定しました。昨年も内勤め(寺族のみ)でしたので、今年は、お勤めを短縮してでもご法話を聴聞するつもりでしたが、内心、しっくりきていませんでした。結果的に儀式のみの法要となり、勤行・拝読文は規定どおりですが、それはそれでモヤモヤを抱えたままです。これまで、とにかく報恩講を回復しようと取り組んでいましたが、回復すべき報恩講とは何か、あらためて問いかけられているように思います。(編集委員：比叡谷 真)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第376号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075 (351) 5260 Fax : 075 (351) 5256

発行日 2021(令和3)年6月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

